

ソクラテスの倫理・教育思想

ーソクラテスについてー

A study of Ethics and Education of Socrates

ー On Socrates ー

和田 正美*

Masami WADA

Abstract

The first purpose of this study is to make a survey of the history in ancient Greece at basic point of democracy. And the second purpose is to make a schoolbook on “European educational history”. We need to understand the culture and the history of the times to understand their educational thoughts. To understand the characters of Socrates in ancient Greece is one of the ways to understand the ethics and education of Socrates.

In this paper I outline the characters of Socrates by his life-story, life-history, Plato’s works and so on. Then I think we can deepen the ethics and education of Socrates.

キーワード：『ソクラテスの弁明』 無知の自覚 汝自身を知れ

I はじめに

ギリシア史以前の戦争を素材にした前8世紀のホメロスの二大叙事詩『イリアス』『オデュッセイア』の詩編では、ギリシア人の心の拠り所である神々や英雄達が描かれ、特に英雄達の言動は、後人を教育するものとして、その暗誦がよこされた。

最も大切な徳である正義、友情、勇気、知恵、貞操などを、英雄、知将などの行動を通して展開し、さらに、ギリシア精神を貫く主知主義を予言するかのように、武勇よりも知略、明知を高く評価し、知恵は勇気にまさり、理論は実践に導くべきものであることを謳っている。ホメロスの叙事詩は、祖国愛を強調し、ポリス市民の倫理的感情に強く訴えた。そして、前7世紀には、ヘシオドスの叙事詩『仕事と日』『神統記』などが栄え、サッフォーなどの抒情詩が全盛をきたした。

そして、前6世紀ごろには、神話的世界観から合理的精神（客観的に認識）による神話批判、因習批判が行われるようになり、自然哲学が始まった。自然哲学者たちは、万物をしてそのようにせしめる根元、始源（アルケー）を、水や火などの自然物を解答として示した。人間を含めた自然（フュシス）を対象に、万物がそこから生成し、そこへ帰っていくところの、宇宙全体のア

* 関西国際大学人間科学部

ルケーを追求する眼は、人間社会の構造の原理、人間の存在を通じての存在の原理、すなわち、倫理に関する規範的なことを問題にするに至っている。しかし、彼らは、人間のこと、人生のこと、つまり、倫理のことを、直接、問題にはしなかった。倫理についての理論的反省を一步前進させたのは、次に登場するソフィストたちであった。

紀元前5世紀後半、アテネで民主政治が盛んになると、ソフィスト（ギリシア語で智者の意）と自称する政治の術や法廷弁論などを教授することによって謝金を受け取る職業的な教師たちが登場し、ギリシア各地で活躍した。ソフィストたちの探求の対象は、自然のことから、人間自身のことに移るに至り、徳（アレテー）の意味を人間に対してのみ適用し限定したのは、歴史的には、ソフィストたちであった。

当時、従来の政治体制とは異なり、家柄でも、財産の多寡に関係なく、言論を支配する者こそが国政に参画することができた。富裕なポリス市民で政治的野望を抱く青年たちは、他人の前で自己の主張を通すための思考の方法、議論の応酬、知識、修辞の術が必要となったため、ソフィストたちから教授を受けたのである。

当時のアテナイの社会は、互いに足を引っ張り合う「嫉妬社会」であった。嘘の告発で人を陥れる、財産を没収し分け前にあずかる、罪なき人を侮辱し痛めつけて儲ける、利己主義がはびこり、道徳はすたれていた。そうした風潮をおおったのがソフィストと呼ばれる詭弁家たちであった。

アテナイの墮落は為政者の墮落でもあった。正義に背いた権力者が富み栄える。これが当時も、社会の現実であった。「不正な人間は、どれほどの権力を握ろうと、実は最も微力であり、不幸な存在である」ことをソクラテスは論証していく。いやしくもしあわせになろうとするなら、正義と節制の徳が備わるようにと行動しなければならぬとソクラテスは述べる。

ソクラテスにとって、神のみが智者なのであり、人間に許されているのは、到達不可能な目標としての知恵を愛し求めていくこと、つまり、愛知者の立場を持していくことであった。

ソフィストたちは、「人為（ノモス）」と「本性（フェシス）」の両者を区別し、フェシスを否定して物事をみようとした。すべてのものを人為的なものと考えようとした。これは、当時の民主的な風潮に乗るものであり、伝統なり在来の諸制度の否定にもつながる恐れがあった。ソフィスト的人間の自己主張には、厳しい自己否定が欠ける点がソクラテスとの大きな違いである。ソクラテスの活動は、そういったソフィストに対する批判として生まれたと言われている。

本稿は、人類史に先駆けて民主政を築いた都市国家（ポリス）アテナイの「繁栄」から「衰退」への時代を生きたソクラテス、そのソクラテスの人となりを一瞥し、ソクラテスの歴史を通じて、ソクラテスの人間像を考察する。

II ソクラテスの人となり

1. 活発な言論の人 勤労を重んじ笑顔で意思強固な人

活発な言論の人で、一冊の著作も残していない。何も書物を書き残さなかったのが、ソクラテスの言行を知ることのできるは、クセノフォーン著『ソクラテスの思い出』、『饗宴』、プラトンの初期の対話篇、そして、アリストテレス著『形而上学』などの記述を通じてである。プラトンが描き出したソクラテスは事実ありのままのソクラテスではなかったであろう。しかし、プラ

トンの対話編をまず何よりも第一等の文献として尊重すべきであろう。プラトン著『ソクラテスの弁明』『クリトン』を含むプラトンの青年期の対話編はいくらかの創作を加えられているにしても、ソクラテスの本質を描き出していると考えられる。

アテナイ市民が奴隷の仕事として嫌った肉体労働を、ソクラテスはアテナイ市民に労働を奨励した。当初、ソクラテスは、父の彫刻の技術を習得し、父の業を継ぎ身を立てていたことがある。

ソクラテスは、いつも晴れやかで、微笑を浮かべ、度量が広く、どんな苦痛にも堪え、巧みなユーモアで人を引き付けた。『ソクラテスの思い出』のソクラテスは、思慮分別に富んだ、時には冗談を交えてものを言う意志の強固な人のように描かれている。

2. 頑健で顔の醜い男 自己鍛錬の人

ソクラテスという語は、「健康な力」という意義があるといわれ、全く頑健であった。アテナイは民主主義形態のもとに人格の円満な発達を目指し、知育・美育・体育の調和のとれた教育を行い、そのための教育機関を整えていた。究極の身体、完全なる美、最高の善であることが理想的な人間像とされた。

鼻筋の通ったギリシア人と違って、ソクラテスは顔は甚だ醜い。目と目の間が離れ、目玉はギョロ目で飛び出て、大きな鼻は上向き（獅子鼻）、唇は厚く情欲に燃えている。体も全く不恰好である。背は低く、お腹は出っ張って、足は短い。歩き方はアヒルに似ていると笑われた。当時のアテナイが理想とする、美しく優雅な姿とは、まったくかけ離れた「醜い男」であったといわれる。「顔つきに悪徳への傾向がある」とまで言われても、平然と、「そうした悪い傾向さえも、自分の修練によって矯正したのだ」とソクラテスは答えている。ソクラテスは「自己鍛錬の人」であったといえる。

3. 敬虔で理性の人 信念の人 知恵と正義の人

プラトンの『第七書簡』の中のソクラテスについて、ソクラテスはいちばん正しい人であり、いちばん敬虔な人であるとの記述がある。厚く深い信仰とともに、粘り強い理性を含んだ魂の持ち主であった。常に反省する人であり、内省する人であり、理性によって考察してみて、最善なことだとわかったことでなければ、行動しなかった。また、死からののがれることが出来たが、自らの信念に従って、冤罪にもかかわらずアテナイの法の決定「死刑」の刑に従った。ソクラテスは信念の人であった。

また、プラトン著『パイドン』の結びは、「これが、エケクラテス、われわれの友人の最期でした。われわれの知りえたかぎりでの当代の人々のうちで、いわば、もっとも優れた人の、そして、特に知恵と正義においてもっとも卓越した人の、最期でした。」¹⁾と記述されている。

Ⅲ ソクラテスの生涯（前469～399年）

ソクラテスが生まれたのは、アテナイがサラミスの海戦でペルシア軍を破ってから10年後に当たる。アテナイが興隆の途についた時であった。ソクラテスの前半生は戦後のいわゆる50年平和期、あるいはペリクレスの黄金時代であり、後半生はアテナイの衰退の時代であった。

前478年には、戦争で破壊されたポリスの城壁再建が急務となり、都市とピレウス港とを結ぶ長

城壁の建設工事が始められ、前457年に完成した。また、前477年、アテナイはペルシア軍に対する防衛体制を継続するため、デロス同盟を結ぶ。前454年、ペリクレスはアテナイが同盟の盟主であることを利用して、デロス同盟の金庫をデロス島からアテナイに移し、その共同資金をアテナイのアクロポリス建造に流用し始めた。

アテナイは、200以上のデロス同盟諸国に対して帝国主義的な支配と搾取を行ったので、アテナイの国力は充実し、軍事・政治・経済の中心となり、学者や文化人の来訪が多くなり、文化面の発展が顕著であった。こうして前455年頃、ペリクレスの黄金時代（アテナイの全盛期）を迎えることになる。

1. ソクラテスの誕生

父ソフロニスコス（語源的にソフロシュネー：思慮、節制）は石工であり彫刻師、母ファイネレテ（語源的にアレテー：徳）は産婆（助産婦）の子として、アテナイの東郊外のアロペケ区に生まれたと伝えられている。

ソクラテスはアテナイの中産階級の家の子として、アテナイでの普通教育をもちろん受けたと思うが、高等教育をどの程度に受けたか、はっきりしたことはわからない。特に父親が教育に熱心であったので、父より当時のギリシアの基礎的な教育を受けることができた。アテナイでは、子供の教育は親の義務ではなかったが、子供の親に対する扶養の義務は、法律的には、親が子供に普通教育を与えたか、否かにかかっていた。

ソクラテスの死については公の記録があって、それによると前399年の春のことであった。その年は『ソクラテスの弁明』から彼の70歳の年であった。ここから逆算すると生年は前469年ということになる。

2. ソクラテスの少年期

ソクラテス8歳（前461年）頃から、政治家ペリクレスの勢力が強くなり、以後、前429年（ペリクレスの死去のとき）まで、民主政下のアテナイは「ペリクレス時代」と呼ばれる黄金時代を迎える。

ソクラテスの子供のころのエピソードは何もないが、『ソクラテスの弁明』に登場する彼は、「私には何か神と神格に関わりのあるもの（ダイモニオン）が生じるのです。そしてそれこそは、訴状においてもメレトスが茶化して書いたところのものなのです。それは子供の時以来私につきまとい、ある種の音声として生じるのですが」²⁾と述べているので、これが彼の子供のころの唯一のエピソードということになる。

3. ソクラテスの青年期

ソクラテスは、自然哲学に強い関心をもち、知的好奇心も旺盛であった。ソクラテス以前の哲学者の思想もかなり勉強したのではないかと思われる。プラトン著『パイドン』『パルメニデス』などにおけるソクラテスの若い回想談でわかる。20歳代に様々な自然学説に触れたことがあり、とりわけ「ヌース（理性、精神）」を原因とするアナクサゴラスの学説に痛く魅了された。

万物を秩序づける原理を知ることによって、「いかにあることが、善であり、悪であるのか」を見出すことができるのではと考えたからである。しかし、ソクラテスは自然の「原因・根源」を

発見することはできなかったので、「自然の研究」から「人間の研究」へと進み、善悪を決める究極の原理を、汝自身の「魂」の内に探求していった。国家の幸福は、まず個々の市民の魂の入れ替えから始めなければならないとソクラテスは考えたのである。

この回想談のどこまでがソクラテスのもので、どこまでがプラトンのものかに関しては、吟味が必要となる。しかし、若いソクラテスが、万有は最善を目指して生成変化しているという目的論的自然学に大きな関心を抱いていたということは確かであろう。

ソクラテスが21歳の頃に、カリアスの平和条約（前448年）によってペルシア戦争は終結した。前447年にはパルテノン神殿の工事が始まった。青年ソクラテスは、この工事を目の当たりにしたにちがいない。町中に活気があふれ、アテナイは黄金時代を迎えたのである。

ソクラテスが20歳の頃から30代後半までの十数年間のことは何一つわからない。28歳から29歳の頃（前441年～前440年）、ソクラテスはサモス島に遠征したかもしれない。

【補足説明】アナクサゴラス（前500年～前428年頃）

前461年にアテナイに来て、ほぼ十年間アテナイで過ごした。彼は政治家ペリクレスの師友であり、アテナイの知識人達に大きな影響を与えた。性質の異なる無数の元素（種子スペルマタ）の混合によって万物が生ずると説き、その結合と分離の原動力がヌースであるという目的論的自然学を説いた。最初の混沌状態から秩序ある世界を創造した原動力としてヌースを考えたのである。この点に関して、アリストテレス著『形而上学』において、「散在するものどもの善くあり美しくあり、あるいは善くなり美しくなることの原因」に関して、「或る人（アナクサゴラス）が、理性（ヌース）を動物のうち存するように自然のうちにも内在するとみて、理性をこの世界のすべての秩序と配列との原因であると言ったとき、この人のみが目ざめた人で、これにくらべるとこれまでの人々はまるでたわごとを言っていたものかともみえたほどである。」³⁾と述べている。

4. ソクラテス35・36歳

この頃、ソクラテスはアポロンの神託に接したと推測される。ソクラテスを崇拜するカレイポンは、アポロン神殿の「デルポイへも赴いて、大胆にもつぎのことについて神の神託を求めたのです。・・・何とかれば、私よりも知恵のある者がだれかいるかと尋ねたのです。すると巫女ピュティアは、より知恵のある者は一人もいないと答えたのです。」⁴⁾と『ソクラテスの弁明』に記述されている。

『ソクラテスの弁明』によると、この神託に接したソクラテスは、いったい何を神は言おうとしているのだろうか、いったい何の謎をかけているのであろうかと、長い間、思い迷い続けた。やっとのことで、この神託の真意を探るために、世間で賢者だと評価され自分でもそう信じている人々を歴訪し、問答してみて、はたして賢者であるかどうかを吟味するという手を考えついた。そして、賢者（政治家、作家（詩人）、技術家の三種）探しを始めたのである。このデルフィの神託は、ソクラテスの生涯の転機となった。

【補足説明】デルフィの神託

デルフィでの神託の言葉の真偽の探求から、「無知の知」に気づいたソクラテスは、神こそが唯一の真の智者であって、人間は知っていると思いついでいるにすぎないという。

政治家、詩人、技術家などの誰もが、智者でないのに智者だと思いついでいる正体を暴露するに至った。ソクラテス自身は自分の無知をよく承知していた。彼らとの違いは「自分は何も知ら

ない」ことを知っているところにあるにちがいない。他の人は知恵が有とうぬぼれている。こうして、ソクラテスは神託の意味を「自己の無知を自覚した者」こそ「最も知恵がある」と結論した。いわゆる「無知の知」である。

人間のなすべきことは、無知を知ることと知恵の愛求である。知恵については、人間はもっと謙虚でなければならないとの結論に達し、このことはまた、デルフィのアポロン神殿の額に掲げてあったといわれる「汝自身を知れ」(度をすぎすなかれと解釈されていた)の教えにそうものであった。

ソクラテスは、「無知の知」というのは、一般的なことがらについての無知ではなく、人間の内にある「人間の本質をなすもの」「善美のことがら」についての無知、人間として善く生きること、美しく生きることについての無知が問題であったのである。

ソクラテスは、「哲学的対話」を自らに神から授けられた「使命」と自覚する。老若を問わず、国籍を問わず、信条を問わず、あらゆる人々に開かれた対話を拡大していった。対話は真剣勝負である。傲慢な権力者や権勢家の偽りの知恵は、容赦なく暴かれていった。ここに、ソクラテスが有力者から恨まれ、後年告訴され、投獄される背景もあった。

【補足説明】汝自身を知れ

「汝自身を知れ」とは、「人間いかに生きるべきか」という普遍の問いかけであり、「真の幸福に目覚めよ」という励ましでもあろう。「汝自身を知る」ことは、「人間を知る」ことであり、「最高の宝は、汝自身の中にある」、「個人的内面の幸福を追求せよ」にあると考える。善悪を決める究極の原理を、汝自身の「魂」の内に探求していったのである。

そして、国家の幸福は、まず個々の市民の魂の入れ替えから始めなければならないとソクラテスは考えたと推測する。また、「汝自身を知る」ことは、「他者を理解する」ことに通ずる。それは「人類の共生」「世界の平和」という根本問題へと連動していくものであると考える。

5. ソクラテス37歳

前432年8月、ソクラテスが37歳の時、アテナイでは民会が開かれ、ペリクレスの提案を是としてペロポネソス戦争開戦が決議された。ソクラテスは前433年冬から前432年6月の間(36～37歳)、この戦争で北部バルカンの都市ポテイダイア包囲戦に従軍していたと考えられる。

プラトン著『饗宴』に登場するアルキビアデスは、従軍時代のソクラテスを次のように述べている。

ソクラテスの話は、男、女、少年の区別なく、みな驚嘆してそれに魅入られてしまうようなものであった。自分をはじめ他の多くの人々はソクラテスに接することで、心臓は激しく動悸を打ち、涙が流れ奴隷のような状態になって恥じいるという体験をした。

また、ソクラテスは、人間の美しさ、裕福さ、世俗的な名誉などといったものをまるで無価値なものと考え、これらを崇める人々に対しては空とぼけているが、彼が真面目になると、その内部には、神々しい金色燦然とした神像があった。

そして、美青年のアルキビアデスは、ソクラテスに恋心を打ち明け、彼と性的関係をもとうとしたが、ソクラテスに拒絶されて果たせなかった。そこで、アルキビアデスは、ソクラテスの資質と節制と勇気、さらに、叡智と堅忍不拔に感服したと述べている。アルキビアデスは更に、ポテイダイア出兵の時、自分が身近で見たソクラテスは、寒さや飢えによく耐えたこと、酒に強かつ

たこと、また出兵中に「思索に思いを集中して」朝早くから次の日の朝まで、まる一日立ち続け、太陽に向かって祈りを捧げたこと、負傷した自分を救ってくれたことなどを報告している。

前431年、エウリピデスは『メディア』を上演した。ソクラテスもこの劇を観たことであろう。それから間もなく、アテナイの人々は、ペロポネソス軍のアッティカ侵攻に備えて、城壁内に集団移住した。ツキジネスの『戦史』によれば、「大多数の者たちは町の空き地や、神域や英雄神の聖地にまで住家を設けた。・・・可能とみれば何処にでも住み着いた」ので、城壁内は、難民であふれることとなった。ソクラテスもその一人であった。

同年5月末、アルキダモス指揮のペロポネソス同盟軍はアッティカに侵入し、耕地を破壊し、二カ月後引き上げていった。その年の冬には、戦死者のための国葬がおこなわれ、集まった人々に向かって、ペリクレスは有名な葬礼演説をしたのである。ソクラテスもこれに参加していたにちがいない。

【補足説明】 前431年ペロポネソス戦争勃発（前404年終結のときソクラテス65歳）

ペロポネソス半島を舞台に、アテナイを中心とするデロス同盟とスパルタを中心とするペロポネソス同盟が行った戦争で、ほとんどのポリスが両者に分属した。前429年ペリクレスの死はアテナイにとって大損失となった。シチリア遠征（前413年）に失敗、デロス同盟の離反が続いた。前405年スパルタ海軍はペルシアの援助でアイゴスポタモイの戦いに勝ち、翌404年アテナイは降伏する。この結果、デロス同盟は解散し、以後アテナイは衰退期に入っていく。

6. ソクラテス39歳

前430年5月のころ、アテナイ人に疫病が発生し、6月には猛威をふるった。人々は遺体に触れることを恐れたため、遺体は処理されないまま町中に放置された。誰彼なしに死んでいく。人々の心はしだいに荒んでいった。

この年の初夏、ペロポネソス同盟軍は再度アッティカに侵入し、陣を定めて耕地に破壊行為を加えたので、「アテナイは、内には疫病、外には耕地破壊と、内憂外患に襲われ窮迫状態がつづいた」とツキジネスは『戦史』で記載している。

7. ソクラテス40歳

前429年（あるいは前427年）、ソボクレスは悲劇『オイディプス王』を上演している。この悲劇は、疫病に苦しむ民の嘆願で始まっており、同じ疫病に苦しんだアテナイの人々の心に強く響いたはずである。同年の冬にペリクレスも疫病にかかって死んだ。ソクラテスは頑健で、たいへん規則正しい生活を送っていたので、疫病が流行したときも、ソクラテスは病気にかからなかった。

8. ソクラテス41歳

前428年6月、レスボス島の四市がミュティレネを中心に結束し、アテナイに反旗を翻した。ミュティレネの籠城軍は内部分裂した結果、前427年6月アテナイに条件降伏をした。ところが、その条件に反して、アテナイは、市内にかくまわれていたスパルタ人や離反の首謀者をアテナイに護送して処刑してしまった。

アテナイはさらに、残ったミュティレネの成人男子全員を処刑し、女・子供を奴隷にすると決議した。翌日アテナイ市民は、この決議の残酷さを反省し、民会で再度議決した結果、小差で処

刑取り消しが決議された。これは国家の正義とは何かを考えさせる事件でもあった。

プラトン著『国家』に登場するソクラテスは、40代であったと推測されるが、この頃のソクラテスは、現実にはこのような事件に出会っているのである。そのソクラテスが『国家』の中で、個人の正義とは何か、国家の正義とは何かという議論をしていることは、まことに意味深い。

9. ソクラテス42歳

前427年、シケリアのレオンティノイ市の外交使節団がアテナイに来た。使節代表の弁論術の名手ゴルギアスは、民会で「すばらしい演説」をおこない、祖国が隣国のシュラクサイの圧力を受けて存亡の危機に瀕していると訴えた。ソクラテスもその演説を聞いたことだろう。アテナイは、同年夏、船隊二十艘をシケリア方面に派遣した。

弁論は、国を動かすほどの力をもっていたのである。弁論術を教えると公言するソフィストたちのもとに、国家社会のことをなそうとする青年達が集まった。ソフィストたちによって、弁論術そのものはいっそう高度なものへと発展した。けれどもそのことで、何が本当の正義で、何が最も得策なのかわからなくなってしまった。ペリクレスの亡き後、民会は実に不安定なものとなり、人心は右に左に揺れたのである。

10. ソクラテス40歳～45歳

前429年から前424年にかけて、ソクラテスに関する記録は何もないが、この間に、デリオン出征と前423年に上演されたソクラテスをソフィストとして戯画化した喜劇作家アリストパネースの『雲』がある。これは、45歳前後のソクラテスがモデルとなっている。ソクラテスの生存中にソクラテスに関して書かれた現存の唯一の作品だということになるだろう。

【補足説明】 デリオンの戦い

前424年から前423年（ソクラテス45歳～46歳）の頃、ソクラテスはデリオンの戦いに重装兵として従軍したことがプラトンによって伝えられている。

作戦は失敗に帰し、アテナイ軍はテーバイの軍に敗れ、退却を余儀なくされた。この退却にさいして、味方の兵たちが四分五裂してしまった中を、ソクラテスは殿（しんがり）をつとめて、沈着の男を示したと言われる。「大威張りの水禽よろしく闊歩して、横目をやりながら」あたりの敵味方を落ち着いて見回しながら進んで行ったとされている。また、プラトン著『ラケス』にも、デリオンからの退却の時、ソクラテスが沈着・冷静な勇敢さを発揮したことを示唆する記述が見られる。

注目されるのは、ソクラテスが「徒歩の重武装で従軍していた」という点である。重装兵であるためには、一定の財産がなければならなかった兵種であるから、のちに貧乏になったソクラテスも、この頃は経済水準がある程度あったと推測できる。親譲りの財産を持っていたものと思われる。生業に従事していないはずの彼に一定の収入源があったのである。この点に関する資料は無い。

【補足説明】 アリストパネースの『雲』

前423年（ソクラテス46歳）、ソクラテスを主要登場人物とし、茶化したアリストパネースの喜劇『雲』が上演された。ソクラテスは、自然学者であり、賢い魂の思索所の先生であり、弟子をもっている。また、思想の出産に関する助産の教師であり、弁論術を教えるソフィストとされて

いる。

このことは、既にこの頃までにソクラテスが、この種の茶化しを受けるに足るような人物になっていたということを物語っている。ソクラテスの社会的活動が世間で周知の事実となったのは、『雲』上演の数年前頃のことであったと考えられる。

しかし、喜劇というものは、あること無いことを面白おかしく、現実のソクラテスを仕立てたものであるから信頼できないという一面もある。

『ソクラテスの弁明』では、『雲』の上演がメレトスによる告訴の遠因になっていることをソクラテスは指摘している。ソクラテスは、「天上地下のことを探求する」自然哲学者であり、「弱めの議論を強めの議論にする」ソフィストであるとされている。ソクラテスにとって心外なこと、事実無根なことであったに違いないが、一般市民の眼からすれば、ありそうなことであったかもしれない。『雲』が上演されることによって、ソクラテスは、アテナイ市民たちの間にソフィストと評判されて、多くの人の知るところとなり、また、多くの誤解が定着するようになっていったと推測される。

11. ソクラテス46歳

晩年には、『ソクラテスの弁明』で、神命による、自分に一文の金にもならない仕事（市民に無知の自覚に至らしめる）を遂行するために、家庭をかえりみる暇もなく、赤貧洗うがごとき貧乏暮らしをすることになったとソクラテスは言う。

『ラケス』は勇気について対話されているが、45歳から46歳ころのソクラテスの人柄について、ラケスはリュシマコスに次のように言っている。「誰でもソクラテスの間近にあって対話を交わしながら交際しようとする者は、たとえ最初は何かほかのことについて対話をはじめたとしても、彼に議論（ロゴス）によって引きまわされ、ほかならぬ自分自身について、〈現在どのような仕方生きており〉、またくすでに過ぎ去った人生をどのように生きてきたのか〉について説明することを余儀なくされる羽目におちいるまでは、けっして対話を終えることはできないのだということをです。また一旦その人がそういう羽目におちいるならば、ソクラテスは以上の点のすべてにわたって、十全かつ立派に吟味しつくすまで、彼は釈放することはないだろうということもご存知ないようです。」⁵⁾

また、ソクラテスは、自他共に「できるだけすぐれた人間になる」ための努力を惜しまない人物であり、「我々自身を現在の状態（勇気に関して無知であるような状態）のままにしておくべきでない」と忠告している。

12. ソクラテス47歳

ソクラテスは、北部バルカンの都市アンピポリスに遠征に従軍したと推測されている。アテナイはアンピポリスをスパルタから奪還するため前422年に遠征軍を送った。ソクラテスはこの遠征軍に参加した可能性があるが、これを示唆しているのは、『ソクラテスの弁明』の一か所「指揮官たちが私を配置したその時には——それはポテイダイアにおいてもアンピポリスにおいてもデーリオンにおいてもそうだったのですが——」⁶⁾ だけであり、他の資料によってこれを裏付けることが出来ない。

13. ソクラテス50歳

この頃ソクラテスは、クサンティッペと結婚したと推測される。『ソクラテスの弁明』でソクラテスは「家族と三人の息子もおります。一人はすでに若者ですが、二人はまだほんの小さな子供です。」⁷⁾と語っている。結婚後間もなく子供が誕生したと想定して考えると、ソクラテスは50歳頃に結婚して子供が一人でき、更に65歳前後の頃に二人の子供が出来たということになる。

クサンティッペはヨーロッパの文献では、悪妻の標本のように見られるが、どの程度までが本当かはっきりしたことはわからない。両者の年齢の開きは少なくとも25歳ぐらいと推測される。普通の女性よりは少々激情的な女性であったというくらいのことと言えるだろう。この点では、冷静なソクラテスと対照的であっただろう。

54歳のとき、アテナイはシケリア島に遠征軍を送って、人的にも物的にも大打撃を受けた。アテナイが衰運に向かう転機となった。

14. ソクラテス62歳

この頃プラトン（20歳）が初めてソクラテスに出会っている。あるいはもっと前から知り合っていたかも知れない。プラトンは悲劇の競演に参加しようと、ディオニュソスの劇場の前でソクラテスと会って、ソクラテスに諷められ、おのれを恥じて、自作の悲劇作品を火中に投じ、ソクラテスの弟子になった。その時プラトンは20歳であったと伝えられている。真偽のほどは不明である。

15. ソクラテス63歳～64歳

ソクラテスは抽選で選ばれて、評議員会の執行部の議長となった。同執行部は、アルギヌサイ島沖の海戦の際、暴風雨で沈没したアテナイ艦船の漂流者放置の件で、10人の軍事委員の責任を問うことになった（アルギヌサイ島沖海戦事件）。結局この裁判で責任を問われたのは6人であったが、彼らを本来のやり方で各自別々に採決せず、一括審議せよという決議が強行された。ソクラテスはこの違法の措置に最後までただ一人反対した。

ソクラテスは、『ソクラテスの弁明』で次のように述べている。「これまで私は国の中で他の官職には何一つついたことがないのですが、評議員になったことはあるのです。しかも、皆さんが十人の将軍たち——海戦で海に落ちた者たちを船に助け上げなかった将軍たちのことですが——を一括して裁くことに評決した時に、たまたま我々のアンティキスの部族が議長を務めていたのです。そのやり方は、後になって皆さんのすべての方にもそう思われたように、法に反していたのですが。その時、私は法に背いたことは何一つ行うことがないよう、議長団の中でただ一人、皆さんに反対して反対票を投じたのです。そして弁論家たちが私を弾劾し、連行させようと身構え、皆さんもまたそう命じて騒ぎ立てている中で、私はこのように考えたのです。すなわち、逮捕と死を恐れて、正義にかなってはいないことを評決しようとしている皆さんと一緒にいるよりもむしろ、私は法と正義とともに危険を冒さなければならないと。しかし、以上のことがあったのは、まだこの国が民衆によって支配されていた時のことでした。」⁸⁾

このことから、身の危険を冒しながらも法と正義を守ろうとするソクラテスの姿勢がうかがえる。

16. ソクラテス65歳

前404年、アテナイは無条件降伏によって、27年間にわたったペロポネソス戦争は終結した。亡命していたクリティアスらが帰国し、彼を首領として、30人の委員会（プラトンの親戚の者クリティアスやカルミデスなどを含めて）が、新憲法制度のために結成された（30人独裁政治）。この委員会は、スパルタの勢力と結んで、寡頭独裁政権に変貌し、戦時中の非交戦者の摘発・処刑を行った。ソクラテスもこの委員会に呼び出されサラミスのレオン逮捕を命じられたが、不正な命令として無視し、一人帰宅している。このことでソクラテスは処刑されたかも知れないが、政権の崩壊により難をまぬがれた。ソクラテスの法と正義を守ろうとする強い姿勢がうかがえる。国外へ逃れていたアニュトスやカレイボンを含む人々は隣国テーバイにあって、トラシブロスの指揮のもとに30人独裁政権に対する武力抵抗団を組織し、これを破った。30人独裁政権が崩壊して、民主政が回復した。

17. ソクラテス70歳

前399年ソクラテスは、民主派の首領アニュトス、弁論家リュコンを後ろ楯とする青年の詩人メレトスによってアテナイの法廷に告訴された。『ソクラテスの弁明』に登場するソクラテスは、これまで自分が人間を吟味し、人々の無知を暴露してきたのは、神の指図によるものであったが、それを若者達がまねて大人をやりこめたので、「メレトスは作家を代表し、アニュトスは手工業者と政治家のために、リュコンは弁論家の立場から」自分を憎く思い、この様な振る舞いに出たのだと述べている。

訴状は、パシレウスの役所に提出された。「ソクラテスは若者を墮落させ、また国家の崇めるところの神々を崇めずに別の新奇な神格を崇めることによって不正を犯している」との洗神罪とくしんざいで告訴された。国家宗教に対する犯罪であるので公訴訟となり、これは特に公訴と呼ばれた。

70歳のソクラテスは500人の陪審員に裁かれる。その様子は『ソクラテスの弁明』に詳しく、ソクラテスは、基礎事実に対して反論し、無罪の主張をした。法廷用語ではなく、ふだんと同じ言葉使いで弁明した。また、ソクラテスは、多くの被告人達がやるように、自分の子供を出廷させて、裁判官達の同情に訴えるというようなことはしなかった。

弁明後、有罪か無罪かの決定が投票によって行われ、ソクラテスはわずかの差で有罪となった。その後、彼をどの程度の罪とするかに関して、原告被告双方の申し立てが行われた。原告のメレトスは死刑を求刑した。これに対し、被告のソクラテスは、自分が妥当と思う刑量を自分で申し出ることになる。ソクラテスは、「迎賓館で食事にあずかることよりもふさわしいことはないでしょう」と迎賓館での食事がふさわしい刑であると申し出をする。迎賓館で国費をもって食事にあずかることができたのは、参政官や外国の使節、特に国家に功労のあった人々（凱旋將軍、オリンピックの優勝者など）に限られていたとされる。

ソクラテスは、自分は「銀一ムナ」なら払うことができるけれども、クリトンなどが三十ムナの科料を申し出るよう勧めていることを受けて、この額を科料としたいと申し出る。自信強きソクラテスの口調は甚だしく裁判官達の感情を害し、第二回の投票が行われ、さらに八十票の大多数（即ち361対140票）をもって死刑が宣告された。

ソクラテスは刑の執行を受けるべく獄舎につながれた。その日は、毎年デロス島のアポロン神へ感謝のために祭礼使を乗せて派遣するデア祭のために船が出発する前日であった。船の艦ともに

月桂冠の飾りつけが終わってから、ペライエウスに帰港するまでの間は死刑の執行が法律によって禁止されていた。ソクラテスの裁判決定の前日にこの祭礼が始まっていたので、死刑執行はその船の帰港の翌日まで延期されることとなった。その期間は、ほぼ30日であったことが知られている。

使節団の船が帰る日（あるいはその前日）の夜明け少し前に、獄中のソクラテスのところにクリトンが訪れ、熱心に脱獄を勧める。『クリトン』に登場するソクラテスは、脱獄の勧めに対して「これは今に始まったことではなくていつもそうだったことだが、ぼくという人間は、ぼくの中にある他の何ものにも従わず、ただ論理的に考えてみていちばんよいと思われる言論にのみ従う、そういう人間なのだ。」⁹⁾と応じ、さらに「いちばん大事にしなければならないのは生きることではなくて、よく生きることだ、・・・「よく」というのと「立派だ」というのと、「正義しく」というのは同じことである。」¹⁰⁾と言う。人間は何のために生きるかという、生きることの目的について言っている。人間が生きるのは、できるだけ長く生きるためではなくて、価値のある生き方をするためである。

どうすれば「よく生きる」ことができるのだろうか。ソクラテスは自らの魂への配慮が何よりも重要であると説いた。ソクラテスの主張は、それまでのギリシア人の価値観を大きく変えるコペルニクス的転回であった。ギリシア人にとって、価値ある人生とは、市民の前で政治的・軍事的に活躍して、不朽の名声を後世に残すことであったからである。ソクラテスの考え方は、アテナイの伝統的な価値観を否定する危険性を秘めていた。人間の倫理における新たな原理を模索したからである。

処刑の当日の様子が『パイドン』に描かれている。ソクラテスは、悲しみの声をあげる妻クサンティッペと幼子を帰らせ、獄舎に集まる親しい者たちと、靈魂の不滅について、いつものように議論をした。議論の後、ソクラテスは、差し出された毒ニンジンの杯を「じつに何のためらいもなしに、やすやすと飲み干し」た。「クリトン、アスクレピオスに雄鶏一羽の借りがある。忘れずに、きっと返してくれるように」という言葉を残して息絶えた。

プラトンはこのとき28歳、これを境に真の哲学に回心し、「目がくらむ思いで」約12年間、遍歴時代にはいつく。ソクラテスの死によって哲学へ転向し、ソクラテスの真の姿を探し求めつつ、プラトン自身の哲学を育てていったのである。

【補足説明】 『ソクラテスの弁明』

『ソクラテスの弁明』は、徹底した反権威主義哲学者ソクラテスの最後を描く、弟子プラトンの傑作である。前399年、ソクラテスは「若者を墮落させ、また国家が崇めるところの神々を崇めずに別の新奇な神格を崇めることによって不正を犯している」というかどで、政治家アニュトスを後ろ盾にした青年メレトスに告訴される。「不正を犯した」という訴因に関して、ソクラテスは一貫して事実無根であると述べ、デルフィの神託のことを語る。「彼以上の賢者はいない」という神託の真意を探るため、自他ともに賢者と認める人々を訪ね対話した。その結果、彼らの過誤を暴いたため、多くの敵が生まれ、多くの誹謗が生じることになり、それが今回の告訴につながったという。

メレトスとの議論で、メレトスの言葉の矛盾を突いて、自らの正当性を主張する。しかし、判決は有罪で、ソクラテスは死刑を宣告される。国法を重んじるソクラテスは、判決を受け入れ、法廷を後にする。

告訴そのものには、政治的な意図があったらしい。また、ソクラテスが、智者と知られる人物の無知を暴いたことに対する恨みもあったと考えられる。また、あらゆる権威に妥協せず、一貫して徳を年少の者にも出会う誰に対しても説いた。特に多くの富裕層の青年たちが心酔していた。当時のアテナイの有力者にとって、ソクラテスは排除すべき危険分子に映ったのである。

有罪確定後も、ソクラテスには国外脱出の可能性が大いにあったにもかかわらず、自らの死を受け入れた。死刑になるかならないかよりも、自分が正しいことをしているかいないかの問題のほうがはるかに大きかったからである。逃亡は自分の罪を認めることであり、また哲学活動を止めることと引き換えに無罪放免になるのは、アテナイの人々を善へ導く彼の願いに反することだった。

あとは死をどう迎えるかという問題に絞られる。死は誰も体験したことがないのだから、それを恐ろしいものとするのは、知らないことを知っていると思っている、これまで対話してきた「智者」と同じである。死は人間にとって、一切の善いもののうちの、最大のものかもしれない。陪審員たちに向かって「もう出ていかなければならない時間です。この私は死ぬために、皆さんは生き続けるために。しかし、我々のどちらのほうがより善いもののほうへ向かっているかは、神以外のだれにも明らかでないのです。」とソクラテスは言い残し、法廷を去るソクラテスの姿は実に英雄的である。と同時に、神の定めたことは全き善であるからそれに逆らう必要はない、というソクラテスの深い宗教的信念も現れている。

Ⅲ おわりに

ソクラテスの生涯を概観することによって、ソクラテスの人となり进行を明らかにした。ソクラテスはいつも微笑を浮かべ、度量が広く、どんな苦痛にも堪え、巧みなユーモアで人を引き付けた。厚く深い信仰とともに、粘り強い理性を含んだ魂の持ち主で、常に反省する人であり、内省する人であった。理性によって考察してみて、最善なことだとわかったことでなければ、行動しなかった。

アルギヌサイ島沖海戦事件における違法の措置に最後までただ一人反対した。また、30人独裁政治のときの不正な命令を無視した。冤罪にもかかわらず、国外逃亡もせず、死刑を受け入れたなど、自らの信念と正義に基づいて行動する人であった。

ソクラテスの真の生活は、35、36歳のときのアポロンの神託を機に開始された。自己の無知を自覚し、老若を問わず、国籍を問わず、信条を問わず、あらゆる人々に「真の幸福に目覚めよ」と「徳」についての対話を始めた。神命による、自分に一文の金にもならない仕事（無知の自覚に至らしめる）を遂行するために、赤貧洗うがごとき貧乏暮らしをすることになった。「正義と節制の徳が備わるように行動しなければならないのだ」と、ソクラテスもこのように行動した。

ソクラテスの哲学における真理の探究方法は、「対話（問答）」であった。共通する徳をめぐる、真剣な対話を通して、相手を真理に目覚めさせていく。ソクラテスは、対話を子を産むことを助ける「産婆」に譬えている。

アテナイで行われていた教育の方法は、教師が生徒の上に立って、外側から知識を注ぎ込むような教育（注入主義）であった。ソクラテスは、真理はこちらが与えるのではなく、青年たちが自らの内側からの力で、知恵を開き、魂を向上させていくこと（開発主義）に取り組んだのであ

る。より高い徳を一緒になって探し求める、麗しき「友愛」の中に、ソクラテスの教育があった。

ソクラテスは誰にでも「わかりやすい言葉」で、「わかりやすい事実」を通して、目指すべき「高尚な思想」「神々しい徳」などについて対話した。単なる難解さは、教師の自己満足にすぎない。「わかりやすい言葉」で高度な内容を理解させることのできる教師、それがソクラテスであった。

70歳のとき、メレトスによってアテナイの法廷に洗神罪で告訴された。ソクラテスは魂への配慮が何よりも重要であると説いた。市民男子だけではなく、あらゆる人々が「魂の世話」をすることにより幸せになれること、人間の外面ではなく内面の魂を重視することが、アテナイの伝統的な価値観を否定する危険性を秘めていたのである。ソクラテスは人間の倫理における新たな原理、善悪を決める究極原理を汝自身の「魂」の内に探求したからである。ソクラテスの人生をもって、倫理革命を引き起こしたといえよう。

転倒の「嫉妬」と「衆愚政治」のアテナイの社会は、ソクラテスに対して、虚偽の告発、不当な裁判、投獄、そして死刑をもって報いた。古代アテナイは、ソクラテスの死後、わずか61年後にマケドニアに平定され、滅び去った。

【引用・参考文献】

- 1) プラトン著 岩田春靖夫訳『パイドン』岩波文庫 p176 1998
- 2) プラトン著 三嶋輝夫・田中享英訳『ソクラテスの弁明・クリトン』講談社学術文庫 pp.55-56 1998
- 3) アリストテレス著 出隆訳『形而上学 上』岩波文庫 p36 1959
- 4) 前掲書2) pp.20-21
- 5) プラトン著 三嶋輝夫訳『ラケス 勇気について』講談社学術文庫 pp.36-37 1997
- 6) 前掲書2) p46
- 7) 前掲書2) p64
- 8) 前掲書2) pp.57-58
- 9) 前掲書2) p131
- 10) 前掲書2) pp.137-138
- 11) プラトン著 久保勉訳『ソクラテスの弁明・クリトン』岩波文庫 1927
- 12) プラトン著 山本光雄訳『ソクラテスの弁明』角川文庫 1954
- 13) プラトン著 久保勉訳『饗宴』岩波文庫 1952
- 14) プラトン著 加来彰俊訳『ゴルギアス』岩波文庫 1967
- 15) プラトン著 藤沢令夫訳『国家 上下』岩波文庫 1979
- 16) クセノフォーン著 佐々木理訳『ソクラテスの思い出』岩波文庫 1953
- 17) アリストパネス著 高津春繁訳『雲』岩波文庫 1957
- 18) 田中美知太郎著『ソフィスト』講談社学術文庫 1976
- 19) 田中美知太郎著『ソクラテス』岩波新書 1957
- 20) 村井実著『ソクラテスの思想と教育』玉川大学出版部 1972
- 21) 北畠知量著『ソクラテス—魂の教育について—』高文堂出版社 2000
- 22) 山川偉也著『古代ギリシアの思想』講談社学術文庫 1993
- 23) 佐々木毅著『よみがえる古代思想』講談社 2003